



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail: daimao@travelmitra.jp)

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3マツイ・ビル 201 TEL: 06-6354-3011

ぼん子画

「満月四人組デカン高原の旅Ⅲ 親不孝者よ②」

どうしてわが輩にだけ、奇跡のような不思議な現象が起こるのか、その意味を“こじつけて”考えてみたい。

2月1日と父との関係を思い出したのは、インドではなく日本に帰ってからである。2月はラージャスターン州へ行く事になっていた。それが延期になったのはサブ・リーダーの父親がガンで余命いくばくもないというのが理由であった。

もう少し述べると、サブ君は理系大学院生で気が合うのでときどき意見を交換する。彼の父親は短大教授だから、いわゆるインテリ家族である。ところが、長い間親子は目を合わすこともなく口もきかない関係にある。

父親の死を目前にして、ことばをかけることのできないサブ君、息子に最期の呼びかけをしない父親、そんな親子ほど恠しいものはない。リーダーから事情を聞いたとき、わが輩は心を痛めた。

これを契機にわが身を「反省」したとき、オヤジの命日2月1日のことを思い出した。

わが家はインテリどころか、粗雑な市場商人の一家である。早朝から夜遅くまで仕

事に出してしまうオヤジの顔を殆どみたことがなかった。月に二度の休日も疲れはてて横になっていた。目をあわすこともなく口を聞くこともなかった。

そんなオヤジが“愚痴”を言うようになった。特に長男であったわが輩に向けられた。家庭的に恵まれなかった苦労話ばかりで、たまらなくオヤジが嫌な時期もあった。

今なら分かる。オヤジが何を言いたかったのか。伝えたかったのか。ただただ、わが輩と話をしたかったのである。もっと話をすればよかったと今は思う。

さて、読者諸氏よ。わが輩にだけ奇跡のようなものが起こると思わないでほしい。奇跡はだれにでも起きている。たいていは、その意味を見過ごしてしまう。あるいは、何かによって、見出すことができない。見出したくないのかもしれない。

何かが起こる。その時に、その意味を見つけることに意味がある、とわが輩は思う。

何も起こらなくても、そこに石ころがあれば、その意味を考えてみる。そうすると別の世界、価値観が隠されていることに気付く。

ジャイナ教では、石ころにも生命があるという説がある。物（地・水・火・風）に生命がやどっている。

だから、ジャイナ教徒は拍手をしてはいけない。

なぜなら、風という生き物を叩くことになるからである。

だから、打ち水をしてはいけない。

なぜなら、水という生き物を打ち付けることになるからである、

(徹底的に、「非暴力」だと思わないかい。読者諸氏よ)

石ころに意味があるなら、父と子の存在に意味がないはずがない。父は死に直面している。「おとうさん」と声をかけてほしい。コトバにだせないなら、紙切れに「お

とうさん」と書いて戸の前においてほしい。それで十分だとサブ君に言った。わが願いが届いたか、届かなかったは知らない。出来るのはそこまでである。

奇跡や不思議な体験を「神」や「仏」と結びつける必要はない。大事なことは、米国の哲学者ウィリアム・ジェームズ（184-1910）も言うように、そこに「改心」あるいは「回心」が介在していることである。そのことによって“ありがたい人格”が形成されることである。

改心とは、ツッパリ少年が教師になるようなこと、回心とは、ぐうたら亭主が“おとうさん”になるようなことである。教師は社会的、“おとうさん”は極めて人格的なことである。

わが輩に改心はあったであろうか。「いや、無かった」。それでは回心はと問われたならば、まだ無い、とご返答申し上げよう。

しかしながら、たった一つ気付いたことがあった。

「1日」の深い意味である。2月1日は父の命日、4月1日に母の命日、父の誕生日でもある。最愛の姉は9月1日に急逝した。

わが輩は何月の1日にこの世を去るのであるだろうか。

追記

やっと奇跡についての結論に至ったが、これを予測していた人物がいた。千鳥童子こと某大学名誉教授である。

『『宗教的経験の諸相』はヨーガの宗教経験についてのご考察、あるいは大魔王の不思議な体験談などに、何らかの形で活かされるのではないのでしょうか。ひらめきを期

待たします」

ウィリアム・ジェームズ『宗教的経験の諸相』は恩師榊田啓三郎先生が翻訳したものである。これをネタ本にした。

もっとも、劣等生大魔王が正しく理解できたか、不明である。何かの機会に千鳥童子にお聞きしたいものである。

このシリーズを終えるにあたって、満月亭の女将さんと泉庵の女将さんに感謝申し上げたい。これほどの奇跡的な出来事に遭遇したことはなかった。その契機を作ってくださったのが両女将さんである。

わが輩は心配している。これほどのネタは次回にはないだろう。筆力が落ちること間違いなし。(ああ、どうしようか・・・)